



玉井義臣さん 対談 堀田力さん

結末、そして前進へ！共感こそが未来を拓く

**東日本を襲った未曾有の大震災から一年。
復興への道のりは、いまだ端緒に着いたばかりだが、
傷つき、弱った人々を支える活動はこれからが正念場である。
日本におけるボランティア活動の象徴的な存在であるお二人に、
大震災のこと、これからのことをお話しいただいた。**

スピード感が求められる ボランティア活動

堀田 昨年の東日本大震災では、「あしなが育英会」は地震や津波で遺児となった子どもたちに対する支援活動をどこよりも早く開始されました。あの迅速さに驚くとともに、さすがは玉井さんと、あらためて感動いたしました。

玉井 大震災が起きたときは、現地事務所を視察するためにアフリカのウガンダにいました。ホテルに着き、荷物を整理しようとトランクを開け、テレビのスイッチを入れました。5分もしないうちに急に映像が切り替わり、それから東北地方を襲った津波の映像が一晩中、流れた。とんでもないことが起きたかと思っていると、日本から「すぐに帰国を」という連絡が入り、結局、事務所に立ち寄る時間もなく、そのまま帰国しました。

堀田 帰ってこられて、早くも3月14日には、地震・津波遺児への特別一時金の給付を発表されましたね。

玉井 アフリカからの帰りの飛行機の中で寝ずに考えていたら、考えがまとまった。今回の支援は、私どもが通常行っている遺児への奨学金貸与事業とは似て非なるものだと判断しました。肉親を突然失った子どもたちが着の身着のまま震えている。すべて流されてしまって、まわりには何も無い。とにかくすぐに、何にでも使える使途自由で、返済不要

の、いわば生活費を給付しようと思ったのです。おかげさまで最終的に1人200万円ずつ、1925人の遺児に届けることができました。

堀田 それだけの寄付がすぐに集まったというのも、40年以上にわたって遺児への支援活動を継続してこられたという実績があるからです。だから、あれだけスピーディに対処することができた。

玉井 堀田先生が理事長を務めていらっしゃる「さわやか福祉財団」も動きが速かったですよね。また、先生は政府の義援金配分割合決定委員会の会長としてもご尽力されました。

堀田 我々の財団では、3月16日から4月30日までウィークデーに毎朝、山手線の駅前に立って仲間と募金活動をしました。集まった募金で、現地に入っている仲間からの情報を受けて必要な物資を購入し、すぐに送りました。それに比べ、義援金の配分に関しては、確かに金額は大きかったのですが、被災者の方々の手元に届くまでのスピードが遅かった。やはり行政が行うことには、どうしても限界や障壁がある。

玉井 今回、スピーディな対応ができたのは、どこに遺児がいるのかを把握する作業を迅速に確実にできたことも大きかった。これは阪神淡路大震災で培ったノウハウがあったからできたこと。すぐに仙台に事務

所を開設し、スタッフを5班に分けて、公民館や体育館などに設けられた避難所の建物という建物に支援告知のためのポスターを貼って歩いた。そうして遺児を特定し、実際に給付金が配られ始めると、それが報道されることで、ますます支援活動に加速度がついてうまくいく。

堀田 それもやはり、しっかりとした実績とノウハウ、そして志を持つあしなが育英会のような民間だからできることですね。

玉井 全日本社会貢献団体機構からも、昨年「あしなが東日本大地震・津波遺児募金」に多額の寄付をいただきました。ありがとうございます。やはりスピード感こそが、いまの時代の社会貢献活動やボランティア活動の鍵だと思っています。

不安をぬぐい去るのは 共感に満ちた助け合いの継続

堀田 我々の財団が募金活動を行ったのは、お金を集めるのが主目的というより、そうすることで通勤途中のサラリーマンの方々から直接、共感を誘い出したかったからです。でも、まずお金を持ってきてくれるのは、子ども、働いている女性、お年寄りの方々。われわれがいちばん社会参加を願っているサラリーマンの反応が鈍かった。これはちょっと悲しかったですね。

玉井 私どもの活動の根幹にある

のは、自分たちがかつて被害者として困ったという経験です。私は、被害者の気持ちといつもイコールですから。

堀田 この社会で一緒に暮らしているのですから、人に対して共感を持つというのは当たり前のこと。いつも単独で暮らしているコアラとかオランウータンとはわけが違う。家族や仲間がいて、共感を持って助け合って生きることが、人間としていちばん幸せな暮らし方です。そうやって人類は何百万年もやってきた。これだけ社会から共感が失われてしまったのは、人類史始まって以来のことです。自分でお金を稼いで自分が幸せになればいい、他人を助けるなんてバカバカしいという考えに、みんなが飛びついてしまった。どこの国も、そうした方向に流れていっている。これを何とか元に戻したい。

玉井 先日、東大で20年続いている人権に関するゼミの記念会合に招かれたのですが、そこで東北にボランティアに行ってきたという学生から、ボランティアについてどう思うかという質問が出た。そこで私は、「キミたちのような若い年齢で一度、ボランティアを体験したら、体や手足がそれを覚えてしまう。誰か困っている人がいたら、自然と体が動くようになる。そういう社会にしていかなくはない」と話しました。学生などの若い人たちが本気でボランテ



堀田力 (ほった・つとむ)

1934年生まれ、京都府出身。弁護士、さわやか福祉財団理事長。京大法学部卒業後、61年、検事任官。大阪地検・東京地検特捜部検事、法務大臣官房長などを歴任し、91年、退職。同年、さわやか福祉推進センター開設(95年、さわやか福祉財団に改組)。2010年、公益法人化。「新しいふれあい社会の創造」を掲げ、ボランティア育成、ネットワーク作りなどに精力的に取り組むほか、福祉・教育・社会保障などのさまざまな委員を務めている。10年11月から、当機構会長に就任。

アに取り組み始めたのは阪神淡路大震災からだと思いますが、今回はもっと多くの若者たちが東北に入った。その意味で、いまの若い人たちには期待しています。

堀田 そのことは私も実感しています。とくにいまの20代半ばから下の世代は、いわゆるブランドものなどに興味がない。ものに引っ張られるよ

りも、心とか共感に価値を置いている。だから、彼らはボランティア活動にも素直に入ることができる。人間捨てたものではないとか、ものほかに振れていた針が、心のほうに戻ってきている。それはいまの若い世代が証明してくれています。

玉井 今回の大震災に関しては、そうしたボランティアなどを、いかに継



玉井義臣 (たまい・よしおみ)

1935年生まれ、大阪府出身。滋賀大学卒業後、証券会社勤務などを経て、経済評論家として活躍。64年、母親の交通事故死を機に交通評論家に。交通事故に伴う諸問題の解決に尽力した後、69年に設立した「交通遺児育英会」で専務理事に就任(94年退任)。93年に災害遺児と病氣遺児を支援する「あしなが育英会」を立ち上げ、98年から会長を務めている。主な著書：『交通犠牲者』『ゆっくり歩こう日本』『だから、あしなが運動は素敵だ』。

続いていくかが大事ですね。お金を配ったら終わりというのではなく、きめ細かいケアで被災地や被災者を元気づけていかなくてはならない。そのため私たちは、今後10年間、継続してケアのお手伝いをさせていただきたいと、被災地の知事さんや市長さんをお願いに行こうと考えている段階です。その核となるのが、震

災・津波遺児の心のケアを行う「東北レインボーハウス(仮称)」の建設と、すでに活動が始まっていますが、被害の激しかった沿岸部にいくつか設ける予定のサテライトです。これらには地元の東北の方々に職員やスタッフとして入っていただき、最終的には彼らに運営をお任せするという形にしたいと思っています。

堀田 地元の方々に自立していただくことが、ボランティアとしてお手伝いする究極の目的です。ですからボランティアが少しでも早く引けるようになることが理想ですが、いまはまだその段階ではない。むしろ孤立死などを防ぐ意味でも、いまがいちばん大事なときです。やはり人間というものは、先が見えない不安に対してもっとも弱い。その不安をぬぐい去るのが、人々の温かさや共感の輪です。いまはまだ先が見えないけれど、支えてくれる誰かがいる、自分のことを思ってくれている人がいる、それがわかれば孤立死や自殺に至らずに済む。そのうえで、かすかでもいい、遠くてもいいですから、やはり先に光を見せてあげることが大切で、それは政治の責任です。

アフリカの子どもたちに夢を託して

玉井 私が交通事故問題に取り組んでいた昭和40年代からですから、先生とのお付き合いもずいぶん長くなります。先日は喜寿を祝う会でもお世話になりました。

堀田 あのところ私は法務省刑事局において、最高でも禁錮3年という交通事故加害者に対する罰則を懲役刑に改正しようという玉井さんたちの運動に感銘を受けた。でも、玉井さんはそれだけではなかった。交通事故によって生まれる交通遺児を支



2011年6月9日、東日本大地震・津波遺児の高校生たちとともにニューヨークのタイムズスクエア前で街頭募金を実施。



2011年3月26日のあしなが学生緊急募金では、さわやか福祉財団理事長の堀田力さんと女優の紺野美沙子さんらも応援参加した。

遺児たちにあしなが育英会の支援制度を知らせるため、被災地の学校、役所などにポスターを貼りビラを置くローラー方式で遺児の所在を明らかにしていった。この機動力があしながの若者の特徴。2011年4月13日、岩手県遠野市。



あしながウガンダレインボーハウスの寺子屋で学ぶ子どもたち。この子どもたちが次代のアフリカを担う。食事を与え勉強させ、高校卒業までの奨学金を出している。

える活動に入られて、そこからさらに災害遺児、病気遺児に対する奨学金制度を発足させ、それが現在のあしなが育英会につながっている。しかも、いまやその活動は、海外の遺児支援にまで広がっています。

玉井 究極の目標として掲げているのが、「アフリカ遺児教育支援100年構想」。これは世界最貧とも言われるサハラ砂漠以南のアフリカの国々の優秀な遺児たちを日本や米国を含む世界の大学へ留学させ、ゆくゆくはアフリカの貧困問題を解決するための新しいリーダーになってもらおうというものです。アフリカの貧困をなくさない限り、世界から貧困はなくなる。これから100年かけて、そうしたリーダーを育てていこう

と思っています。やはり教育ほどいい仕事はないというのが実感です。

堀田 そこまで長い目でものごとを見ている人には、なかなか出会えません。でも、かつて日本も戦争でゼロになったところから復興を果たしたことを考えれば、アフリカの国々にも十分、その可能性はある。そのためには人口爆発にならないよう少子化すること、やはりものだけを追うのではなく、人と人のつながりを大事にしなが、人ともので作る幸福を追求することだと思います。そうしないと、アフリカ自体が持てる者と持たざる者に分裂しかねない。

玉井 これまで先進国と言われる国々がアフリカをここまで貧困にしました。それはやはり、共感とか

平等意識というものがなかったからです。アフリカは最後で最大の消費国となる可能性を秘めた大陸ですから、それをみすみす現在の先進国のような格差社会にできてははいけません。それはアフリカにとってだけでなく、世界にとっても不幸なことです。

堀田 先日の喜寿の会では、ウガンダのレインボーハウスと回線をつないで、現地の子どもの映像が流れましたが、子どもたちが玉井さんのことを「タマちゃん」と笑顔で呼んで手を振っていましたね。きっとあの子どもたちが将来、アフリカを背負う人間になりますよ。

[対談実施日：3月16日]